

学校をつくろう！通信



第134号

学校の役割

その 113

前号に引き続き、大学で何を学ぶのか？

生まれて来てしまったぜ！
しかもヒトにだぜ！！

です。

印刷がうまくできないかもしれません、掲載してみます。下の2枚の写真をご覧ください。



クロマニオン人が描いた牡牛。対象との対話から生まれた姿です。



左手におにぎり、右手にシャモジ、下のリードは「性別役割分担お断り」

まで遡るのだと思っていました。そのツバメが僕の目の前に現れたのです。ヒトとは似ても似つかぬ姿でしたが、遠~い、遠~い気の遠くなるような遠~い日の自分のルーツとなった生き物に出会ったようなおかしな感覚になったことを覚えています。

靈長目の中のヒトという種の歴史は400万年前に現れた猿人から原人、旧人、そして20万年前に

現れた新人へと進化してきたと言われています。20万年後の僕たちも新人に分類されています。

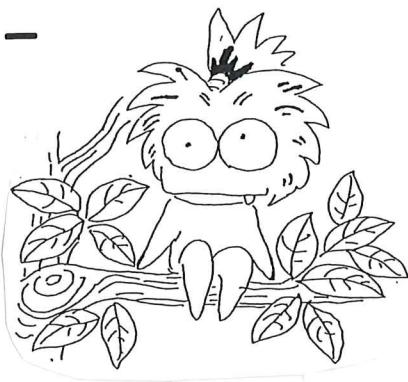
2万年以前のこととはわかりませんが、それ以後、僕たちの時代も含めて、新人の歴史の中でラスコーの壁画に匹敵するような造形物はないのではないかと思っています。この時代のほかの洞窟壁画を詳しく調べたわけでもありませんし、封印される以前の本物を見たこともありませんが、何年か前に九州国立博物館で開催されたラスコー展で精巧なレプリカを見ました。あの暗闇の洞窟の中で獣脂を灯し、高い壁や天井には足場を作り、石器の鑿と木の根や毛皮の絵筆と岩を碎いた顔料で見事な絵画を描き上げています。どれほどの手間と労力と時間をかけてあのような壁画群を作り上げたのか、その質と量は僕の想像をはるかに超えるものだと思います。

おかしな言い方になりますが、今の時代に換算してどれほどの経費が必要だったのか。さらに重要なことはその経費を必要なものとして他者と共有する過程で、彼らはどんな会話を積み重ねたのか。描く対象に対して何を語り掛けどんな感情を手に入れ、地域でともに生きる皆とそれを共有したのか。そのようなプロセスがなければあのような表現は生まれないでしょう。ヒトが自らを高らかに表現者、アーティストであることを宣言した時間があったのです。アーティストは職業の名ではないのです。

そうして2万年後、那覇の飲み屋街の千ベロ酒場の柱に貼ってあった小さなステッカー。こちらを睨む覆面レスラーのような人物の二つのマナコと大きく開けた口からの叫びに僕は呼び止められました。このステッカーをしばらく見ていたら、ラスコーのアーティストを思い浮かべていました。あなたたちのアートは今も生きている！ここにもこんな姿で！（印刷が見にくいときは「闘うおにぎり！」を検索）

大学で学ぶのはアーティストとしてのヒトを手放さない生き方を皆と共有するためなのです。（ほ）

がじゅまる しんかぬちゃー



(生徒・学生のコーナーです)

「俺が思うトウンジー」

高等部 住田瑠羽

俺がトウンジーで思った事はまず最初に楽しかった！けどね、この楽しさをゲットするために皆すごく頑張ったんだよ。正直言うけど準備期間はカオスだった。皆パツパツすぎて常に誰かがキレたり、さぼったりしてた（ちなみに俺はサボリ組の方だった）。もちろん悪い事だけじゃなくて面白いこともあった。例えば中等部が練習してるとき（出し物の練習は皆音楽室だった）忘れ物を取りに戻り間違ってドアノックせずに入ったら鼓膜が破れるかと思うほどの音量で怒鳴られたり、それくらい皆真剣だったんだね。

高等部の出し物を練習してるときが一番ハラハラした。だって小道具見られたら面白くなくなるからね。ちなみに高等部の小道具は全部自分たちで作った。

今回のトウンジーのいいところは（俺の意見）ほぼ高等部が持って行っちゃった気がする。でも一つ言わせてほしい。。。。俺がDJの振りしてた時、めっちゃ恥ずかしかった！頑張ってテーブルと謎の黒い布でDJブースっぽくしてたけど、あれちょっともDJじゃないからね！DJのデの字も入ってないからね！

ここで少し反省点があるんだけど、今回のトウンジーは時間がオーバーしすぎた（1時間半オーバー）。それは本当に申し訳ない事だと思ってる。自分たちが楽しみすぎて周りが見てなかつた。別に楽しむのが悪い事だと言ってる訳じゃないけど、今回はあるにも考えなさすぎた。この事を踏まえた上で次回のトウンジーで生かして行けたらいいと思う。

最近トウンジー、いや、行事ごとでやる出し物が毎回毎回同じような物ばかりで飽きてきた。高等部では（特にトウンジー）似てるような物あるいは王道な物がないように考えてやってると思う。例えば今回のトウンジーは桃太郎？のアレンジバージョンをやってみたり（当日一日前くらいまで誰もゴールが見えてなかった）前々回？では3分クッキングをやってみたり。何を言いたいかって言うと皆もっともっと違う事に挑戦してほしい！意見を出し合ひぶつけ合い、だめならだめでまた最初っからやり直せばいい！こんなに面白い学校にいるんだ、チャンスを逃さずしっかり噛み締めていこうぜ！



珊瑚舎スコーレの新年は毎年「新春朗読バトル」で始まります。初顔合わせには「自作の2作品を持ちよる！」というお約束。この自作品で1回戦、2回戦と挑みます。負けても敗者復活戦で残ることが出来るので最後まで気を抜くことはできません。準決勝は事務局が用意した作品を、決勝では会場からお題をもらい即興で作品を作り朗読します。優勝者には「珊瑚舎杯」と「チャンピオンバンダナ」が贈られます。卒業生やスタッフ他、保護者、兄弟姉妹、外部からの参加もあり会場はにぎやかでした。今年は小学生達がかなりの内容、言葉を使った詩を上み会場をわかせました。

今年初のお題は「耳」（詳しくはHPをご覧ください）。このお題に挑んだのは決勝まで進んだ中等部カイ、高等部ヒビキでした。実は1回戦で勝敗がつかず（最初のお題は「こんにゃく」）、2回戦をやることに。2回目のお題で見事、チャンピオンに輝

いたのはカイでした。2人の即興作品を紹介いたします。

ふくぎのふあー



「耳」

中等部1年 カイ

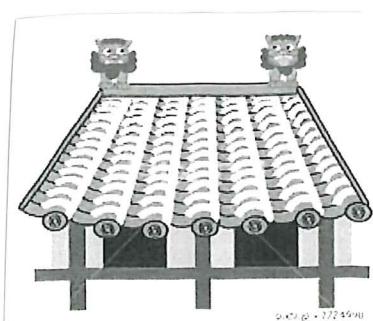
獵師は獵銃を構えた
草原の中、風が吹く
ウサギがこちらを見つめていた
そっと引きがねを引く
ウサギは足を怪我していた
野獸にでも襲われたのか
獵師は引きがねを放せなかつた
ふいに空へと一発、パンと撃つ
ウサギが逃げた
草原の中、風が吹く
遠くにウサギの耳が見えた



「耳」

高等部3年 ヒビキ

耳は聞くためにあるのではない
じゃあ何のためにあるのか
それは感じ取るためだ
ドン ドン カン カン
いやだ ありがとう ごめん
大丈夫 がんばれ
ぼくは何かを感じ取る



(講師・スタッフのコーナーです)

「数と記号／高認数学」(中等部・高等部)

担当講師 宜保 貴也

こんにちは、珊瑚舎スコーレ高等部の「高認数学」、中等部の「数と記号」担当の宜保貴也です。去年の7月から珊瑚舎での2つの授業を持たせていただきました。

中等部ではテキストを使って自分のペースで進めていくのと「5分で論理的思考力ドリル」という本を使った問題を出す2つの軸でやっています。中等部は授業の進め方にすごく悩んでいたのですが、学校と同じペースで学習したい生徒もいてテキストはやったほうが良いかなと考えているのですが、もちろんテキストだけだと数学の嫌いな生徒には退屈だと思うので、「5分で論理的思考力ドリル」を使って数学を解く際に随所に出てくる5つの考え方による分類されていて問題を解くことができます。本人たちは数学をやっているつもりはなくとも数学に必要な考え方方が身につければよいと考えています。

高等部では高認数学に合格するという目標もあるので、それも目指しつつの授業になります。7月の方は自分がテキストを進めていたのですが、それでは面白くないので生徒たちに代わりに授業をしてもらうこともありました。最近は高認のテキストと論理的思考力ドリルを進めています。授業が90分なのでドリルでウォーミングアップをやって高認の単元1つやってドリルをやるようにしています。高等部は5分計って真剣に解いてくれます。先に分かった生徒も、答えをいうことはせずにまだわかっていない生徒のフォローに回ってくれます。この本は10歳から120歳までとけるので、数学的な知識は全くいらずに数学的な力をつけることができるので、高認のがちがちの問題だけでなく気軽に解けるドリル

を使って楽しみながら授業を進めています。

このように中等部も高等部も、ただ数学をするのではなく楽しく数学的な力を養うことを目指しています。これからもみんなが少しでも楽しみながらできるように授業をしていきたいと思いますので、今年度の授業も残り僅かですが、よろしくお願いします。

子どもがんまり便り



「子どもがんまりに参加して」

長田 美紗(参加保護者)

数年前に一度、友人に誘われて参加させて頂いた、子供がんまり。長男が最近ゲッチョ先生の著書を読んでいたのを機に今回12月1日、久々に参加させて頂きました。ゼミの学生さん達が優しく分かりやすく、ワクワクするワークショップをしてくださいました。火打ち石での火起こし。起きた火での焼きマシュマロ。原始的な楽器のうなり木作りに、虫笛、ドングリ笛作り。公共施設のワークショップにはない、刃物や火を使ったちょっとだけハラハラする自然の中での物作り。小学三年生の長男はもとより、幼稚園生の次男もとても楽しい時間を過ごせたようです。カマドで炊いたご飯も美味しく、食の細い息子達がびっくりする位よく食べていました。

帰る前に次も絶対来たい！と話していた息子達。家に帰ってからも、興奮冷めやらぬ様子で参加できなかつた父親に虫笛を披露したり

「ゲッチョ先生がメガネケースに捕まえた蜂を入れていたよ。お友達と沢山蜘蛛を捕まえたよ。」と報告していました。

普段息子も、息子の学校の友人達も頭の中はゲームのことばかり。公園にいてもゲームの話をしています。3年生にもなると虫や自然が好きな友達は少なくなっているようで、公園で同級生と虫取りをしても、30分と持ちません。久しぶりに虫と自然が好

きな同世代の子供達と思う存分遊べて、息子達はとても生き生きとしていました。友達と汗を垂らしながら虫取りをして時間も忘れて一緒に遊ぶ。一昔前の子供の日常ですが、現代の那覇に住んでいると残念ながら中々難しいです。

スタッフの皆様、そして講師の皆様。素敵な場所で、素敵な体験をさせて頂いてありがとうございます。次回の子どもがんまりも是非是非よろしくお願い致します！



✿ 第4回「子どもがんまり」で講師をつとめてくれた、沖縄大学の学生達からも感想を寄せてもらいました。紹介します。

赤嶺 陸斗

「うなり木」や火打石、虫笛を使って「原始時代を体験する」という活動を行った。色々準備して、イメージできていたつもりだったが、実際の子ども達は良くも悪くも想定外で面白かった。例えば自分達の想定では、「うなり木」を出して音を鳴らした時、盛り上がると思っていたのが、「うなり木」を出した瞬間に「これは～だ！」「違う～だよ！」と何かわからない状態でも興味津々で盛り上がって驚いた。大人の私たちは「スゴイもの」に興味を惹かれるが、児童にとっては「わからないもの」に興味をひかれるのだということに気づかされた。実際に子ども達を相手にすることで、見えてくるものが多くあり、自分にとってとても良い経験となった。



沖縄だより

珊瑚舎スコーレ校外施設「山がんまり」で昨年12月、陶芸窯「がんまり窯」が完成しました。窯の焚きしめをする為、生徒達が泊まり込み、夜通し火入れ作業をしました。その様子を生徒の文章で紹介します。

「がんまり窯火入れ物語」

高等部 東 佳祐

12月17日、3日がんまり初日にがんまり窯の火入れを行いました。窯の火入れは、窯という作品を完成させる最後の重要な工程です。3年かかったがんまり窯も最終工程まで行けました。

午前10時から火をつけ、1日かけて窯を炊いていきます。最初は、ほんとに小さな火で窯全体を温める感じでした。急激に温度を上げてしまうと壁に大きな亀裂を入れてしまうので、窯に着けた熱電対（温度計）につながるデジタル表示板とにらめっこし、慎重に小枝を燃やしていました。100度を行かない温度を1時間キープして、そこから数時間おきに100度ずつ上げていきました。作業が順調に行き午後11時半には目標だった800度に到達できました。

800度まで行くと木を燃やすのに大量の空気も必要でした。燃えて小さくなった木が空気の通り道をふさいでしまい徐々に空気が減り、火が弱くなっていました。火を強くするために空気の通り道を作らないといけませんでした。夜中にトタン屋根に上がって1メートル近く煙突を伸ばしたので、煙突が煙をたくさん吸い込むようになりました。

窯の中は、800度もあるので熱い熱いと呼びながら作業していました。800度を1時間半キープしてから窯の蓋を閉めて、ゆっくりと温度を下げていきました。温度が完全に下がり切ったのが次の日の夜中でした。約2日かけてがんまり窯の火入れが終りました。今は、壁のヒビを修正しさらに完成に近づけています。

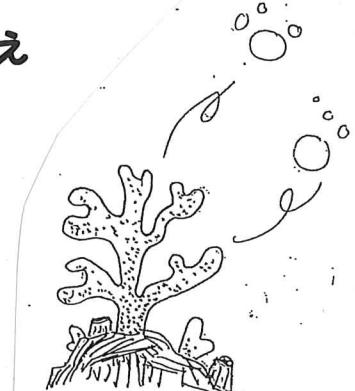
今回の窯の火入れは、すごく貴重な体験になったと思います。机に座って毎日を過ごしていたら、800度なんて体感することができなかつたと思います。前にいたら顔が溶けそうで、長時間いたらぶつ倒れ

ると思うほど暑かったです。太い木材も一瞬で木炭になって、気づいたら白く灰になっていました。あの暑さは、忘れられないです。

難しいこともありました。火の温度を常にキープし続けることです。木を1本入れると高くなりすぎてしまったり、逆に抜いてしまうと低くなりすぎてしまうことがよくありました。やっていると火の強さと、木の燃え具合を見て調節が少しできるようになっていきました。今後のがんまりでも活かせる気がします。次は、生徒が作った作品を入れ、1000度を超える温度でやるううなので今回学んだこと、反省を次に繋げなたいと思いました。



ポリプのゆくえ



珊瑚舎から旅立ったポリプの幼生達（卒業生、講師、そのほか島立って行った人たち）が、その先々で今どうしているのか。リレー形式で綴ってもらいます。

2019年、僕と一緒に生まれた平成は令和に変わり、僕は30代という年齢を迎え、子供が生まれた。その三つの出来事は、僕の思春期を僕自身から大きく遠ざけたかもしれない。文章の依頼を、せっかく下さったので、今回は平成が連れ去ってくれたその思春期の黒歴史を、今だからこそ、ひもといてみたいと

思う。

恥の多い青春時代を生きてきた。とても繊細で、傷つきやすいゆえに実はキレやすい。

他人にキレイな為に、傷つかない方法を講じる必要があった僕は、報復攻撃を最小限に抑える為に温厚キャラを演じ、大抵のことを受け入れる器の広さを捏造した。「僕は無害な人間なので、あなたも僕を傷つけないで下さいね」というメッセージを始めたキャラ作りである。

しかし小学生時代に培った高飛車な性格を完全に隠し去る事は叶わなかった。本質的に僕は、大抵の人のことを見下げて日々を過ごす、エゴイストである。よってその時も、上から目線で人を見ているという事実を、みんなに見抜かれていたことと思う。これが僕の防護策の、最大の欠点だった。優しさと寛容さの旗を手にしながらも人を見下す様というのではなく、あまりにも気持ち悪く、一体どれほどの人を不快にさせた事だろう。この時の僕について渾名は「インチキ野郎」である。

トゥンジーアシビーの準備期間中に、こんな思い出がある。

晴渡った12月の昼間。警察署の向かいに建てられたボロビルの屋上で、僕たちは一体なんの稽古をしていたのだろうか。ともかく僕は張り切っていて、それに反して仲間達は冷めきっていた。同学年の全員が、十代にありがちな無気力感を漂わせる中、唯一僕だけが謎の熱血漢っぷりを發揮していた。「みんながんばろーぜ」と意気込む人間がいるというのに、十代の無神経さはあまりに残酷で、彼らは完全なる無反応を示した。そこで流石に動搖した僕は、すこし傷ついて、若干まごついた。その有様に、彼らが不敵な笑みを浮かべるくらいの間を置くと、駿介がなんとこう言ったのである

「はやく仕切れよ」

え？

一瞬頭が真っ白になって、気づいたら僕は駿介をぶん殴っていた。一発殴って案外いけると思ったのか、ついでにもう一発ぶん殴った。駿介には全く無関係な他人の恨みも、拳に乗せて。

「僕の思い、君にとどけ」という気持ちで喰らわせ

た二打目である。かくしてインチキ野郎と無気力十代の戦いは、一瞬でインチキの大勝利となつたのである。これが、僕の思春期に於ける唯一の勝利だ。後の思春期は結構な闇だった。

坂口安吾の言葉に「人は、勝つことは出来ません…、ただ、負けないのです」というのがあるそうだが。まさにその言葉通り「負けてなんかいない」と歯を軋ませながら寝た夜が何度あったことか文字数と時間の関係で本題にたどり着けませんw

追記：ほぼ何もかけませんでしたが、今思い出すとどれも味わい深い、愛しい時間でした。絶対戻りたくはないけれど（必死）

2007年度卒業生 坂本 樂

★ ★ 事務局便り ★ ★

★卒業生の坂本菜の花のドキュメント映画「ちむぐりさ・菜の花の沖縄日記」が桜坂劇場で3月まで上映中です。3月28日からは東京東中野のポレポレ座で上映されます。ぜひご覧になって下さい。

★今春卒業を迎える夜間中学の生徒が年末に脳梗塞で入院という知らせが入る。87歳という歳を考えると復帰は無理ではないかと案じていましたが、医師もびっくりするほどの回復力で1月末に登校。学校に戻りたいという本人の強い気持ちが復帰を成し遂げた要因のようですね。すごいですね。

★ ★ ★

●今年度(12月1日～1月26日)寄付・カンパを頂いた方々
石田みどり鹿糠文子坂本和子岡村健手塚賢至照本祥敬市野寿子
当山幸江森口美千恵三浦幸子山田道子助川寿美子式部恵子丹羽
雅代與儀勝子与那霸晴海湯本貴和上田秀一大城喜春北上田登久
子盛口佳子真津昭夫家門収一長嶺由紀子橋川由美子小渡律子幸
地江美子城間あづき松茂良米子名城悦子所扶久代石野裕子矢崎
智章尾崎せき松田晴代萩原真美城間栄順村上呂理伊波雅子仲里
博彦下地孝野村佳雄西山哲平智海竹内新有)ラボータ柴田健松永
和子山城良子中嶋一子儀間小夜子野畑裕保高野澄夫泉恵子辰巳
万里子鈴木和男見城慶和照屋まち子西原邦男杉浦修一郎親川裕
子松原慶子閻宏子遠藤真広田中由香子太田紀子辻口光生斎藤光
子山城千秋橋川由美子山田晶子安田圭太郎大垣千鶴古堅苗新垣
良宏新垣由美子岡崎奈々子友寄和子脇元美智子嶺井千恵美奥本
さつみ志賀マサ子坂本新一朗麻鳥澄江沖教祖八重山支部武田富
美子嵩元のり子高橋恵美子藤原良子

発行者：珊瑚舎スコーレ事務局 遠藤知子

住 所：〒900-0022 那霸市樋川1-28-1-3F

Tel : 098-836-9011 Fax : 098-836-9070

Mail : sango@nirai.ne.jp

URL : <http://www.sangosya.com>